

# 電子ジャーナルへのアクセスルート

## —愛知医科大学における調査—

小林晴子, 坪内政義  
愛知医科大学医学情報センター(図書館)

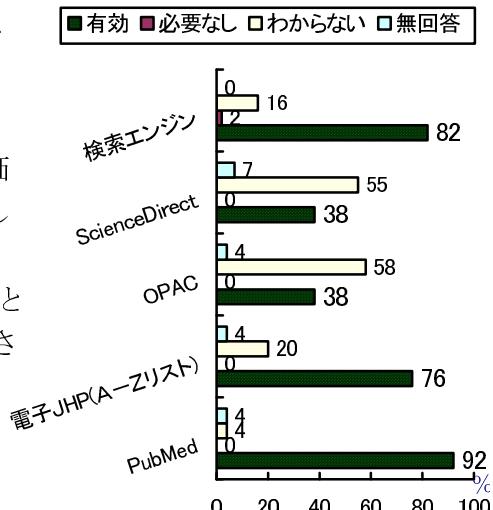
**背景・目的:**電子ジャーナルは、フルテキストへのアクセスルートを格段に増加させた。当館でも、アクセスルートの確保に努めているが、個々のリンク作業の労力や、紙媒体中心のシステムで電子ジャーナルを管理することの難しさが課題となっている。そこで、サービスのあり方と書誌・所蔵データの管理方法を検討するため、利用者のアクセスパターンや満足度等をアンケート方式により調査した。

**調査方法:**(1)愛知医科大学教職員323名を対象に2005年5月にアンケートを実施。45名から回答を得た。回答者の内訳は、基礎科学(2名)、基礎医学(14名)、臨床医学(26名)、看護(3名)。(2)分子医学を研究対象とする教職員を対象にJournal of Biological Chemistry(JBC)での、フルテキストへのアクセスパターンについて2005年5月にアンケートを実施。14名から回答を得た。

**結果:**(1)アクセスルート別評価の割合は、右図のとおりである。PubMedの評価が1番高く(92%)、アクセス頻度も「週2、3回」の回答が多かった。また、Yahooなどの検索エンジンも「毎日」の利用が53%を占め評価も高かった(82%)。一方、OPACは、目録検索を主体としているため、用途の違いはあるものの、「わからない」(評価できない)の割合が58%、アクセス頻度も「ほとんど使わない」の回答が目立ち、認知度・利用度の低さが明らかになった。

(2)JBCフルテキストへのアクセスパターンを利用頻度の高い順に挙げてもらった。

「PubMed⇒検索⇒フルテキスト」ルートを1番に



挙げた人が14名中12名で、もっとも多かった。その他には

「JBCホームページ⇒検索⇒フルテキスト」や「JBCホームページ⇒コンテンツ⇒フルテキスト」「他文献の参考文献リンク⇒フルテキスト」も利用するとの回答を得た。

**考察:**データベースとのリンクの有効性は高く、今後もデータベース側との連携が必要である。また、OPACの利用度は低かったが、当館ではプリント版とともに電子ジャーナルの書誌をOPACに搭載し、冊子体目録やPubMedLinkOutを利用しておらず、OPACの書誌作成は不可欠である。今後、利用パターンをふまえたアクセス環境を整備するために、管理の一元化やリンク作業の簡便化、用途に応じたデータ抽出などを可能にする電子情報資源管理システム(ERMS)の構築が必要と考える。

**文献:**尾城孝一.電子情報資源管理システム-DLF/ERMIの取り組みを中心として-.情報管理